

山王靈驗記繪卷詞書

(公刊)

繪卷詞書集第十九

小 引

一、こゝに載せるものは山王靈驗記なる名を以て呼ばれる蓮華寺所藏二卷、井上侯爵家所藏一卷、生源寺所藏一卷の詞書である。この山王靈驗記なる名稱は原初よりのもとは考へられないが、續群書類従には之と同系の詞書を載せ、山王利生記と題し、生源寺本は之を續山王利生記と題して居り、又本朝畫圖品目が山門僧傳と云へるあり、井上侯爵家本は又頼豪雙紙とも呼ばれた。之等は何れも何れのものであつたかは明かでないが、一聯をなしたものの、殘卷であると思はれる。

一、詞書を活字に移すに當つては、原本の體裁を尊重して、改行は原本に従ひ、又原本に於て誤字の左側にを附して右側に正字を書せる際の如きもその體に従つて置いた。但し異體の假名はすべて現行のものに改めたことは例の通りである。

一、尙之等繪卷についての一通りの解説は別掲拙稿を参照されたい。

蓮華寺本

(上 卷)

(詞第一段)

叡山十代座主僧正増命は左大史業内
安岑の息也父母子無事を歎て年來三
寶に祈つ、此和尚を産り和尚天性慈に
して高明拔萃也幼少より遊戯の心なく
受戒の後未曾臥寢云々梵僧常夢示云
汝莫退菩提心と教化する事度々也智證大師
につきたてまつりて三部の大法を受けて練行
不怠にして威験拔群せりき時に東塔
西谷のほとりに四郎谷といふ所あり谷の
上に龍の尾とて高き岡あり其上に巖
そひたり形師子の蹲踞しつゝ口をあけ
るに似り寶幢院にむかひたり此故にや
昔より西塔學徒然へき人多く天亡(カ)しけれ
は地相の輩皆此いはほの故なりとぞ申
あへりける和尚思惟し給はく我か高祖傳教
大師は當山を開山王權現佛法をまもり
給事も併顯密之學徒のためなりしかるを
此巖猛獸の形に似て其精人氣を吸歟し
からは山王護法兩界諸尊速是を摧給へと
祈念して三箇日之間巖をまはらへて居給

たりければ寛平三年辛亥夏一旦ニ雷電して
磐石悉く摧破しぬ大なる鎚にて打音そ
聞ける佛神の効験といひなからゆゝし
かりける事也龍尾の下にはくたけ落たる
石當時もおほくみの彼伽毗羅外道か
い(レ)と成たりけるも陳那菩薩の偈を書
給ければ其石忽にくたけにけり信力のいた
る事かくのみこそ仁和寺の太上天皇御
登山ありて廻向心戒をうけさせ給ける時は
此和尚御受戒の師にてそおはしける則
戒壇院の内より紫金光明かゝやきた
りけりこれは三聚淨戒の光也とぞ信
ある者はおほく感見しけるか様の
効験なりければ山王護法の冥助
さこそはいちしるかりけめ

(繪)

(詞第二段)

圓覺寺の宗叡といふ碩徳ありきもと
山門の學侶也けりいとまつしかり
ければ常に山王の御寶前にして出離
生死の期までも霞濃煙ほそく雲袖風
さむからん事は行法の導なるへし祈(マ)な
めなハぬ様に助給へと祈念しける處に
山王夢の中に示給けるは汝當山に
してはいかにも貧道なるへき身なり
速に離山すへしいつくにありとも

必ずはこゝむへし明旦はやく大嶽に
いたりて京のかたをのそまむに塔婆の
見えむ所に行て住すへしとあり
ければ宗叡おもひけるは我いとけなく
して二親の家をいて台嶺の室に
入しよりこのかた遮那止觀の名望
を此地にして遂く極樂都卒の往
詣も吾山よりとこそねかひし(三)年
來すみなれし蘿洞の栖を辭て心にも
あらぬ聚落の邊所に身を終む事こそ
かなしけれさりとは神慮様あれは
こそとてなくく立出けり夢相の
ことく行たりければ白河の圓覺寺
といふ寺ありけりすなはち眞照僧都
の房にいたりて密教の淵底を極て
東寺の高徳たりき本朝眞言八祖
の内其一とそきこへける

(繪)

(詞第三段)

其後宿願ありて加州の白山寺へ詣られ
けるとて叡山東坂本をうちすきられけるに
社頭の方より鳥(鳥カ)一飛來て進退身を離
さりけり日漸暮ぬれば鳥しろく成ぬ
夜明れば即黒く見の加様にしてそ隨
付たりける誠不思議なりけり

(繪)

(詞第四段)

白山よりかへりける間にも此
鳥なを先のことくそしたかひ
ける東坂本をすきければ社頭
のかたへそとひさりにける宗叡
あやしみ思て山王に詣つゝ
いのり申ければ夢中に示て
いはく鳥(鳥カ)といふは守護のために
我侍者を付たりしなり自元
いひしそかしいづくにありとも
其好をわするへからすとそありける
貞觀四年眞如親王ともろ
ともに入唐したりける仁なり
同七年歸朝の後僧正の位に
いたり清和天皇御受戒の師
たりけり行年八十二にして
元慶八年にそ入滅せられける
眞如親王は五竺のさかひまで
斗藪すへきよし發願し給
けれとも本意を達せずして
羅閣の座にまはり賜けり
宗叡は思のことく歸朝山王の神
約誠にかたしけなかりけり

(繪)

(詞第五段)

冷泉圓融の比のことにや讃岐守經元

とかや任國によりて下向しけるに大風

にあひて舟海中にしつみたすかる
ものなかりけり其中に三歳の子を
いたきたる女はしつみて子は板にのりて
いそ山もとにうちよせられたり人のとを
る所にもなければ山陰になきるたり
大なる猿とも根をほり菓をひろひて
やしなひけり夜(カ)るもさるともいたきて
あたゝめすゝきかるかやなとを家のやうに
とりをきて置たりかくて五歳にもなりぬ
山臥おもはさるに見あひて子細をとふに
小兒われはけものにあらす猿にはくゝまれて
いのちはかり存たりとかたりけるにしかるへき
事にこそとおもひてかきおひてゆきに
けりかくてとかく養育するにすてに
十歳はかりになりぬとし月この小兒やみ
かちなるを栗田口なるやとの家主みこに
ものをとひてこらんせよといふあひた御子
のおりふし通けるをよひて間に死靈
口によりたる躰なりいかなる人にて御渡
候そと尋にわれはこの小兒の父讃岐守也
任國以後下向せし時惡風にあひて
上下ことく海中にしつみぬこのやと
の家主はわか母なりくはしく尋らるへし
さてこの子は山王の御はくゝみによりて
たすかりし事猿にやしなはれたりし

次第までかたりけり山王の御眷屬

になるへきものゝさもなきによりて
年比わつらふなりと云ければ家主この
ことをきゝてあらふしきやさては此
兒はわかまこにてこそあんなれ故讃岐
守にゝたまひたる不思議さよとこそいひ
つるにとてなき悦あひけりさる程に
又十禪師おりさせ給て御託宣あり
この子二歳のとしめのと祭禮の時いた
きてまいりたりしに御輿のすゝをならし
たりしよりいとをしくていまゝても見はな
たぬ也と云々すなはち家主山臥にこひ
うけて山へのほせけり出家得度して高
位にいたりて先途あくまでとけたるよし
見えたり誰人といふことまでは分明としらす
のちに勳いるへし

(繪)

(詞第六段)

侍従大納言成通郷の上わつらひ侍ける
時祈のために湛秀已講大般若よみ
てゐたりけり病日にそへておもく成
ければ願なとたてんとて彼已講を近く
よひていひあはせけるあひたにおさなき
上童三尺の几帳を飛越て已講か前に
居たり驚あやしみてたかおはするそと
とふに小女我は十禪師也不淨の事

あれはそれをと⁽²⁾との給已講あさ
けりて云その事こそ心え侍らね實の
十禪師にておはしまさは聖教のこと
はりは鑒給らんいつれの經文にか物
忌せよとかれたる諸法淨不淨なしと
こそ侍によしなき事とてかめて人を
なやまし給こと甚あたはぬ事也と申に
小女云わ僧學生とてなましろなる事
をいふか我は諸の聖教の文字ことに
物忌せよとのみとかれたるとみるなりわ僧
か學問はされは文のうらを見るかとて目出
けなる文を半枚はかり誦し給けれとも
聞とるに及す小兒文ならひそむるには
俱舍頌とてよむそかし其はしめに
諸一切種諸冥滅拔衆生出生死泥と
いへるはいかに生死泥をは駄へしとこそ
みえたれそれ五時の説教區に別れ
たれとも出離生死は聖教の大綱也
而に諸の衆生愚癡にして空しく
往かへるをみれば生るゝもにくゝ死もにくき
そかし是によりて衆生をみちひかんか
ためにあとをたるといへとも猶生死をは
いめとつよく誠なりわ僧學生ならば
生死ないといふ文をいたせしかあらは
我物忌せしと仰らるゝ時已講涙を
なかして誠にことほりなりければかくまて

弁侍らすさてさまゝにおこたり申て我
今より物忌仕らんと誓ければさらは向後
の事を病者にもよくおしへよこのたひは
ゆるさんとして寢人かことくしてあかり給
けり神慮誠はかりかたし人により
やうにしたかふへき事にこそ

(繪)

(下 卷)

(詞第一段)

光明峯寺禪定大閤の御息將

軍として關東御經廻の比訴詔事

ありて京より下たる女房ありけり

ならはぬたひのすまひ事にふれてた

よりなかりければあさ夕の煙たえたるお

りもありけり或時ことに難去事侍て

鎌倉の小町といふ所に廻旋する入道

のありけるに廿貫の用途をそ借たり

ける月日ほとなく過ければ四十貫にも

成にけり其後なをかなはさりければ文

なんとなをつくりあらためたれともかひな

なきありさまにて又八十貫にそなりにける

今はせん方なくてつきまはりける下人十

人はかりあるをそとらるへきに成にけるあさ

ましともいふはかりなし父母の時よりつきま

はりたる譜代の者もあり一つ二つより手

つけたるもありゆくゑもしらぬ方へはなれ
行なんする名残しのひあふへき心ちもせさり
けり後の世はかならずなんとといひ契て聲も
おしますなきるたりけるかせめての事に年
ころ馮奉し日吉を鎌倉に名越いふ所に
山王堂とてあかめたてまつれるに引つれて參
詣して七千度をまいらせけりつゝましき身
となりはてゝかゝるうき目を見るこそかなし
けれ今生こそむなしとも後生には必一
佛土の縁をむすはんとそ祈あへりける

(繪)

(詞第二段)

かゝるほとに此女房に物かしたる商人の

寵愛の女子病惱して驗者よりましなと

よひあつめつゝさはきあひければ女子詫宣

して云是はさせる惡靈邪氣にもあらす

いかなる有智效驗の者祈とも我をは

いかて降伏すへきいさゝか事のしるし計

なりやすきほと事なるへし神勅に隨

は、病たち所にやみなん若又神勅を

たかへはいかゝあらむといひければいかにも仰に

こそ随めと申に女子の云別の子細なし彼

女房にかしをきたる物不日にゆるしあたふ

へしその事をさして祈ともなければとも

互に別をなけきつゝ志を同して歎かなし

む事の哀におほゆるなりとうちくときけ

れは東西もしらぬおさなき者の神明

の御詫宣ならてはいかてか加程に分明にあるへきとそしたしきうとき云のゝしりける父母やかて其文書をひらひてま

いらすへきなりとておほくゆい合たる證文をとりよせえらひければ我にたまへやくとりいてんとともよりしれるやうにほのかなる燈のかけにて一紙の文書をぬき出してこれこそとてうちをきたるをみれば彼文書なりけりさてそ病惱しつまりにける止ことなき事にそ侍ける

(繪)

(詞第三段)

則小女か父母おもひけるはか程山王の御いとをしみの人にておはしけるを知らずして日ころなさけなくせめつらむこそくやしけれとてやかて八十貫のふみを返すのみならず衣裳酒肴なとゆゝしくして彼女房のやとへそゆきけるおもひまうけたる事なければいまはとられんするよとて下人ともあはてさはきてかなしむほとに事のやうを委くかたりける時そ上下皆たなこゝろを合て悦あへりける末代なりといへとも山王の御方便まことにかたしけなかりけり

(繪)

(詞第四段)

下野國二荒山に大夫阿闍梨藏尊と云者あり比叡山に住山したりし初は寂尊僧都の弟子也けるか日光別當法印の門弟と成て常日光山へそかよひける先年病を受けて命已終ぬ三日といふに蘇生て云我死ぬとおほえし時大地さくるかことくにして底へ入ぬ則二の牛頭鬼有てあひしたかふ長七尺はかりなりける藏尊をくしてはるゝとゆきて宮門にいたりぬ亦官廳をみるかことし外に小屋あまたあり藏尊をは小家に入てをけり亦赤衣の俗の長八尺はかりあるか大なる札を持て門の内に入る目をいからかして藏尊をみる其躰をそるへき事はるかに牛頭鬼には超たり心中にいかになんするやらむ赤衣の顔色を見るによるへしとおほえす又白襖着たる人長七尺はかりなる俄現して牛頭鬼向て物を云其語は聞へす即宮門のうちに入て庭上にたてり琰王に事の由を奏する躰也鬘ありて白襖の俗藏尊をくして河原とおほしき所をすく牛頭鬼もあへて子細を申さすさて河原に高岸あり岸に一の穴あり其口圓座はかりなり俗をしへ

て云汝早此穴をくゝるへきなりといひければ藏尊問云誰人そやかたしけなくも我をたすくる俗答云我は是山王十禪師の御使也汝幻少より住山して顯密に徳なしといへとも隨分山王を仰たてまつりき而壽限いまたつきすして冥吏のために禁せられたれは十禪師御使をつかはして助給へる也云即此穴にいらむとするに身つかれ心よはくしてかなはさりければ此俗腰をゝして入つとおもひて則蘇ぬとなくゝかたりけり

(繪)

(詞第五段)

貞應の比山徒にて隨分の修學者有けり腹の病を大事にしてあやうく成ければ醫師にとふらへとも驗なし陰陽に問にも占なひ出たる事もなし今は偏に冥の加護をたのまむと思なりて日吉地主權現は本地藥師如來にておはします助給へと祈念す身まつしかりければ本尊も持奉らす纔に紙にすりたる藥師佛を枕にかけて祈申けり夢の中に此佛おほせられけるはわれは日吉の地主權現也汝返々おろかなり此度たすかりとも終にのかるへき死にあらず因果のことはりを弁なから日比後世のた

わへもせぬこそ口惜けれ早わか方便にて
三季の命をのふへしそのかまへをすへき
よしおほせられて腹の中より虫一とり
いたして詠をしめし給て云しりてしらすは
いかうからむとしめし給とみて夢さめ
にけり病さはくくやみぬ其後横川に
こもりてつとめおこなふ事をこたらず
三年といふに臨終正念にて終りにけり
生者必滅のことはりをしらぬ人はなしされとも
うるはしく後生のつとめする人は百人に一人も
ありかたき也それはしりてしらぬ人なり此は
學生にて知てしるへき智者也さて
こそ知てしらすはいかうからむと示給ける
にそけにたのもしく止事なきことなり

繪

(詞第六段)

嘉録の比或人黒髪なる馬のまことに
うつくしきをかひけり日吉卯月祭に
馬場わたさむれうに人のかりけるにいた
はりの馬とてかさゝりければこの馬つな
を引切てさかもとの方へはしり行をとら
へむとしけれともかなはすつるに日吉の社内
鳥居のもとにて身つから身のかわを
くひやふりひきさきなとして倒ふしぬ
みる人あさますといふことなし和光
同塵の日はかなき事までもとかめ

おほしめすにやおそろしく不思議なる
ためしにそ時の人は申ける

(繪)

(奥書)

右畫兩軸者土佐之筆跡疑無
之者也於余賀陰今枝近義爲
乃祖追遠再興蓮華寺以寄
附之永加常住天物給仍需予
片言故鑒證之耳

寛文三年五月廿三日 狩野法印探幽印

井上侯爵家本

(詞第一段)

第二十六代の座主西方院和尚院
源は後一條院御宇寛仁四年七月七日
天台座主に補せられけり同年十二月
廿日權僧正に任せられて治山八ヶ年の
あひた治安萬壽の比何の年とはしらす
天下飢饉して山門煙を斷しに座主
此事を悲て山王に祈請せられし夢想
に大宮寶前に詣し給けるに正面の格子
あけられたり其うちをみれば無止事高僧
枕のうへに居給へり夢心地に大宮權現にて
わたらせ給なりと思たてまつるに此時こそ山
門飢饉の事は申さめとおもひて則事の

よしを啓白其詞云近日天下飢饉山上
衰弊悲哉松門煙絶草庵食乏自非
權現之神恩者爭助僧侶之法命乎云々

其時高僧左右之御足をさし給ふ
御あしのうらたゝれて處々に御血を現せ
りさて仰下さるゝ様は近日西國のかたへ
行向て千僧供を求つるに我足損壞か
くのことしされとも猶もとめえす仍只今
北陸道の方へ行むかふ也と云々夢さめて
落涙ことにをさへかたし三箇日を経て
北陸道より大檀越上洛して俄に千僧
供をそひきける其後そ千僧供をはかな
らす座主受用せられける

(繪)

(詞第二段)

比叡山に運賀聖救とて二人の明哲侍けり兄
弟とそ聞る共に智行優長の人幼しては
駿河國にそ住ける其あたりに社のありけるに
巫女あつまりて神樂なとしけるに兄弟つれつゝ
見けるに大なる蜂二來て此二人の上に飛
廻りければかたへの人拂のけむとしけるに
巫女詫宣して云様蜂は山王の侍者なり
努々いとふ事なかれ此二人は則叡山に上りて
徳をひらくへき器也神明かつく侍者をさし
くたしてまほらしめ給なりされは今もつゝしむ
へき事ありてといひければ父母これを

きゝて則叡山へそのほせける兄は還賀とて
弟^マ廿二代の座主也智行共に兼て八十五
歳までそおしはしける弟は聖救僧都とて
探題の職にいたり時の名徳なりけり

(繪)

(詞第三段)

中比山門の長宴南都の永超東寺の
成尊三井の頼豪とて智行高明顯密兼
學して震旦までも聞たる碩徳ありけり
白河院繼躰の君ましまさゝる事を歎き
思食して承保元年に頼豪に勅して
の給けるは太子を祈出すへし勸賞は請
によるへしと云々頼豪勅を承て懇祈を
いたす中宮賢子忽に懷日ありて承保
元年十二月廿六日皇子誕生あり敦文親王
是也叡感比類なき所に頼豪賞を申す
戒壇をゆるさるへきよしを申す三井戒壇
はたやすくゆるされかたきよし勅答ありければ
頼豪恨ふかくして即本坊に歸七日の間また
く飲食をたつ上皇此事を開召して承暦
元年八月比江師匡房卿勅を承て實相房
に向て案内を伺に頼豪僅對面すといへ
とも其躰甚怖畏すへし霜髮長生て老
躰憔悴す兩眼は底にしつみ白髮は針を
たて忿怒の面を現し聲をあけて勅約違
變のうへは一生の行業をもて三途の怨因に

廻向し我祈出すところの王子ははやく相具し
たてまつるへきなり其向顔只今最後也とて
障子をたて、けり匡房卿よしなき御使して
無益の事見つと思てはうゝ退出してけり
事の次第を奏聞しければ上皇も氣むつ
かしくそおほしめしける

(繪)

(詞第四段)

頼豪怨願を發す怨念默止かたくやおほし
けん關白殿是を優して戒壇をゆるさるへ
き歎と申されけり叡慮もわきかたくおほし
めしけるおりふし御夢の中に御枕の邊に
矢をつまよるをときこえければ誰ならむ
と御尋ありければ叡山西坂本邊に侍老翁
也世には赤山とそ申侍る戒壇執達^{にん}の直あり
御免を蒙て年來持ところの流鏑^やを放と
申さるゝと覺ければ御夢さめにけりさてそ
戒壇の事は打捨られにける頼豪はいく
程なくして入滅しにけり承暦元年八月十日太
子も薨給ぬ御歳四歳にてそおはしまし
ける頼豪誠にいみじかりける人にこそ抑流
鏑の事は大外記師元か記に委し赤山と
申は慈覺大師大唐より傳法歸朝の時
飄風波をあけ船舟海に沈ぬへかりければ
本山に向て護法山王を念奉られけるに
不動毗沙門船の上にあらはれ給のみならず

赤衣の貴俗白羽の矢を、ひて出現せり
是は震旦赤山といふ山の明神也泰山府
君也大師歸朝の後叡岳の西坂本にそ勸
請せられける日吉の御眷屬にして天台の
佛法を守神とそなり給たる上皇は太子の
薨卒を歎思食して大僧正良眞をめして
汝か計として繼躰の王子を祈出へしと勅
定ありければ良眞山王三聖に懇祈をいた
さは何王子降誕なからんやとそ申されける
さて承暦三年七月九日皇子誕生あり
堀川院御事は也ゆゑしかりし山王の
靈徳又僧正の効驗也とそ

(繪)

(詞第五段)

東塔東溪月藏房桓舜僧都といふ
明匠有けりかた若かりける時の事
にやありけむ余にまつしめて離山
のおもひそ有ける縁にふれて伊豆の
溫泉にくたりて説法のこと有けり權
現是を感じて夢に告ての給はく汝
かならず本山に歸へし然は大位にいたり
なむ爰桓舜いよゝ信をいたして後世
の事を尋申ければ重夢想に西方
に生へしとそ示されける其後本
山にかへるといへともなをまつしかりけり
なくゝ山王に祈申に更に其しるし

なし知たる人稻荷社にこもりけるに
相伴て参籠してこのことを祈に七日
に滿ける夜の夢に神殿の御戸を
をしひらきて唐装束の貴女我胸に
二寸はかりなるふたに千斛と書たるを
をしつけたまへりいみじき神恩蒙
ぬとおもふほとに鳥居のかたより止事な
き貴客の眷屬圍遶したるかいり給
へりさきの貴女出あひたまひけるに
貴客の、たまふ様桓舜と申法師の望
申事やはへりつると申されければさる
事侍り七日の間様々法施して懇切
に申ければ相はからひはへりぬと申給ふ
貴客のめゝあるましきことなり我にも
祈申つればいかなる營花（つばな）をも與へかり
つれとも態きゝ入侍らぬなり急めし返と
のたまふ貴女いみじきあやまりしはへり
ぬる其僧いまいてす召返すへしとて
胸のふたをとりかへしたまひぬ桓舜
おもふ様貴客山王にこそおはすらめ我と
こそ御計なからめ餘社の神恩をさへ
妨給事よとらめしきあまりに涙を
をさへてゐたりけり貴女申されけるは
桓舜いかなるゆへありてか資縁を妨まし
ます貴客のたまはく此僧は順次に往生
すへき物なりもし存生のたかならば

出離叶へからすと仰らると見て夢覺に
けり事の様衰にかたしけなく
おほえければ其後は山にかへりのほりて
永一旦榮花の運命を願はすして
偏に往生淨土の祈精の外他事
なかりけりされは臨終正念にてそ終
ける今生は大會の探題法性寺の
座主天王寺の別當まで經のほり左
府三十講公家寂勝いづれも拙賞に
あつかりけり伊豆權現の本山に歸は
かならず大位にいたり後生は西方淨土
なりと示現ありけるもたかはさり
けり

（繪）

生源寺本

（繪）

（詞第一段）

延慶正和の比廣義門院と申しは
西園寺入道左府の御女也正和二年
七月二日御産平安皇子降誕目出
かりし事也去應長の御産は皇女にて
無念なりけるに彼御うらみを散せ
むとおほしめしけるにや今度は偏に
山王に祈申されけり安居院法印

覺守を日吉の社に籠られて本地供
なんとそ行はれける其修中に御産
平安たるのみにあらず皇子降誕の
由聞ければ法印いそぎ馳参たり
けるに御驗者二人（山のは實靜正正寺のは道順僧正）御馬引
れなんととしてゆゝしくそありける
法印参入候由被申入たりければ
入道左府急ぎ御對面ありて示さ
れけるは今度の御産一すちに山王の
御計也我山王に祈念申ていさゝか睡眠
の間に猿一出現して大なる橘のすほゝと
したるあり猿申云氏橘を進へし其橘
を給と申て取かふると見て夢醒畢
其後時日をたかへす御産平安也（云々）則
次年より當社に御願を始置るゝ者也其
次第御願文に見たり量仁親王天子の
位に備給は山王の御威光もいしるく我
山の繁昌も昔にはちすこそとて時の人は
申ける

（繪）

（詞第二段）

正應三年十二月十六日安居院の法印の
惣門の脇より火いてきてほとなく本堂
にかゝりけりおりふし上下ことゝく留守
にて當番の承仕法師一人外なかりけ
れはとかくして本尊をはいしたて

まつるといへとも累代の山王の御
躰を焼たてまつらむ事を歎て

神殿の鑑をたつぬれともをき所

をしらす思切たる輩四五人煙の中

へ入てうちはなたむとしけれとも妻

戸といひ四壁のはた板といひ堅固に

して卒爾の構ちから及かたくして

徒に走出ぬ火も散して後面々此

事をなけく□に安居院の向に賀茂

社の神主檜大夫義俊といふ物あり

彼の家の門脇にたき木を積置たる

上に七鋪各々の御躰内五鋪忽然

として出現します神主驚而本所へ

告申す則送たてまつり畢さていま

二鋪は焼給ぬと悲歎の所に翌年の

春衣笠の仙洞の御懺法仁和寺五智院

僧正實海于時安居院憲基法印已講參會

僧正申されけるはさても安居院炎上の

時唐繪やらんなる形像二鋪弊坊の

井けたの上に有けるを坊人取置候

さる事やと申されけるに七鋪山王の内

今二鋪焼給ぬところ存つれ一定此御

躰かと覺よし申されければ新造に

箱を結構して嚴重にをくりたて

まつらる正應の事なれば無下にま

ちかき事也末代といひなからやむこと

なき事にこそ

(繪)

(詞第三段)

大隅國住人帖佐の平三宗能子息三郎

信宗生年廿七文永二年九月十日相摸國

鎌倉を出て遠江のなたといふ所を過ける

に俄に風はけしく波あらく天くらかり

人つかるゝほとに海水船に入て忽に沈む

へかりければ信宗同舟の輩ならひに水

手梶取にをしへて云今は心のをよふ

所にあらす今生海底にしつむとも後生

は必ず助給へとて一心に大悲山王を唱へ

たてまつるへし我幼少より名越の山王

に功を入志をいたす故也とて信宗南無

大悲山王と申ければ傍輩同音にそ

唱へける信力熾盛の故にや神感掲焉

にして帆柱の下に山王堂の別當了仁と

いふ僧同弟子薩磨房二人そ忽然と

して現したりける山王すてにあらはれ

給へりと信心猛利なる所に又猿丸三

十はかり船中に走めくりて水をすくひ

捨けり夢かうつゝかとそおほえける

是を同船したりける武藏國の

御家人すかやの五郎梶取男信宗三

人はかりそ分明に見けるその外は

しらすりけり上古もありかたき

事なりけり

(繪)

(詞第四段)

山王の利生いちしるくして風波則

しつまりぬ露命わつかにたすかりけれ

とも帆柱くたけ梶おれてせむ方なかり

けるになを神慮とおほえて天龍川

のすゑにそからくして流れつきにける

同十三日に伊勢國とまといふところ

へいたり文など書つゝ了仁かもとへそ

つかはしける信宗其後社頭に

歸參してさまゝの神樂なと

せさせけりいみしかりしこと

なり

(繪)